

# 未来の看護師を育む新カリキュラム

座長 寺西正美<sup>†</sup> 太田郁子\*第73回国立病院総合医学会  
(2019年11月9日 於 名古屋)

IRYO Vol. 75 No. 2 (132-134) 2021

## 要旨

地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進に向け、多職種が連携・協働し適切な保健・医療・福祉を提供することが期待され、2022年度より第5次カリキュラム改正による看護基礎教育がスタートする。私たちは長年培われた国立病院機構附属看護学校における看護基礎教育を大切にしながらも、将来の看護師を育成するカリキュラムを構築する必要がある。本シンポジウムでは、社会が求める看護師像と現代に育った学生の背景から①第5次カリキュラム改正の意図、②これからの看護職に求められる多職種連携を取り入れた取り組み、③臨床が看護基礎教育に望むこと、④「思考力・判断力・表現力」を育む学習支援の実際について、各シンポジストから発表していただいた。

厚生労働省医政局看護課教育体制推進官関根小乃枝氏による第5次カリキュラム改正の意図についての発表では、改正ポイントについて説明がなされ、大阪南医療センター附属大阪南看護学校教育主事藤尾泰子氏は、多職種連携を学生時代から育むための自校での取り組みを紹介した。静岡医療センター看護部長井上淳子氏は、管理者としての豊富な経験の中で迎え入れてきた新卒者の有り様から、臨床での教育の取り組みと新人看護師の現状、臨床が基礎看護教育に望む教育、専門職教育について意見を述べた。最後に石川県立大学基礎看護学准教授石川倫子氏は、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」を育成する必要性を述べ、他者と協働して思考・判断・表現を深める対話力や科学的に思考・吟味し活用する力が求められると説明した。その上で臨床判断力の育成にも繋がる「思考力・判断力・表現力」を育む教育方法の一つとして「パフォーマンス評価」を紹介した。

早朝開催のシンポジウムであったにもかかわらず、教育と臨床双方から多数の参加があり、看護師に求められる姿や新たな教育カリキュラムの考え方への関心度の高さがうかがえた。

キーワード 看護基礎教育, 第5次カリキュラム改正, 新人看護師, 協働

医療の現場は、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進に向け、多職種が連携・協働し適切な保健・医療・福祉を提供することが期待されて

いる。そのような中で、看護職においては対象の社会的背景をはじめとする多様性、疾病などの複雑化への対応が求められている。したがって看護基礎教

国立病院機構名古屋医療センター附属名古屋看護助産学校、\*国立病院機構静岡医療センター附属静岡看護学校（現所属：国立病院機構三重中央医療センター） †看護師

著者連絡先：太田郁子 国立病院機構三重医療センター 看護部 〒514-1101 三重県津市久居居神町2158-5

e-mail: oota.ikuko.bv@mail.hosp.go.jp

(2020年1月31日受付, 2020年11月13日受理)

The New Curriculum to Nurture Future Nurses

Masami Teranishi and Ikuko Oota\*, National Hospital Organization Nagoya Medical Center Affiliated Nagoya School of Nursing and Midwifery, \*NHO Shizuoka Medical Center Affiliated Shizuoka School of Nursing

(Received Jan. 31, 2020, Accepted Nov. 13, 2020)

Key Words : basic nursing education, Fifth curriculum revision, rookie nurses, collaboration

育においてもそれらの能力を育成するカリキュラム構築が必要となり、厚生労働省において看護基礎教育検討会が重ねられた。2019年10月に報告書が提示され、2022年度より第5次カリキュラム改正による看護基礎教育がスタートする。

私たちは、長年培われた国立病院機構附属看護学校における看護基礎教育を大切にしながらも、新たな発想を導入し、将来の看護師を育成するカリキュラムを構築する思考作業に取り組まねばならない。そのため本シンポジウムでは、社会が求める看護師像と現代に育った学生の背景から、教員自身が柔軟に「未来の看護師を育む新カリキュラム」を描き将来に向けてのスタートが切れるよう①第5次カリキュラム改正の意図、②これからの看護職に求められる多職種連携を取り入れた基礎看護教育の取り組み、③新人看護師を受け入れる側である臨床が看護基礎教育に望むこと、④「思考力・判断力・表現力」を育む学習支援の実際について、各シンポジストから発表していただいた。

厚生労働省医政局看護課教育体制推進官関根小乃枝氏による第5次カリキュラム改正の意図についての発表では、改正ポイントについて説明がなされた。改正の骨子は、人々の療養の場の多様化に対応した実習とするための科目領域の考え方や時間配分、従来よりも柔軟となる実習時間および単位の考え方である。具体的には、総単位数が102単位へと5単位増え、総時間数の規定はなくなった。また、臨床判断力や倫理的判断等に必要な基礎的能力の強化に向けた解剖生理学等の内容の充実が図られた。さらに、教育方法の工夫も必須となり、看護教員養成講習会のあり方についても検討されたとのことである。今後教育方法の工夫による効果的な教育の推進については、看護師養成所へのメッセージとして、「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」に明記されることも説明された。

大阪南医療センター附属大阪南看護学校、教育主事藤尾泰子氏は、多職種連携を学生時代から育むための自校での取り組みを紹介した。同校は、公共交通機関を利用して30分以内の近距離に薬学部を有する大学があり、平成30年3月から学術交流に関する包括協定を締結した。これを契機として互いの職種つなの理解に繋がるSmall Group Discussion (SGD) を実施され、共に専門職を目指す志気を高める効果が得られている。SGDの内容は、1回目はそれぞれが専門職を目指す動機や、目標とする各専門職像を

表した。次に自分たちのカリキュラムを持ち寄り、それぞれを共に分類し、共通科目が何か、内容や時間数など何が違うのか、視覚的に明確にすることで互いの職種の特徴を知る機会となった。また、自分の職種の特徴から、患者に何を提供する職業なのかを、再認識することもできたという。この交流学习から、目指す職種、学習期間、内容に相違はあるが「患者のために」という思いは同じであり、学生からは、互いに協働していきたいという感想が得られている。

同校では、今後この取り組みを発展させ、互いに連携をとりながら、支援しケアの提供を実践する臨地実習を目指したいと考えている。そのためには学校間のカリキュラム調整や実習体制作りなどの課題を調整し協調的に職務遂行ができる医療人の育成を目指したい、と結んだ。

静岡医療センター看護部長井上淳子氏は、東海北陸管内全域にわたって管理者としての経験を有し、その豊富な経験の中で迎え入れてきた新卒者の有り様から、臨床での教育の取り組みと新人看護師の現状、臨床が基礎看護教育に望む教育、専門職教育について意見を述べられた。

現代の若者の特徴として、コミュニケーション能力の低下から基本的な資質を備えていない学生や若者が多い。このため、2006年経済産業省は人材育成の上で必要な能力を「前に踏み出す力」・「考え抜く力」・「チームで働く力」とし、これらを社会人基礎力として示している。一方、看護師養成所の運営に関する指導ガイドラインでは「看護師に求められる実践能力と卒業時の到達目標」として「ケア環境とチーム体制を理解し活用する能力」があり、保健・医療・福祉チームにおける多職種との協働、対象者を取り巻くチームメンバー間で報告・連絡・相談等を行うことが示されている。これは、看護基礎教育における臨地実習の行動目標に掲げられ実施している内容である。学生時代は実習指導者や教員の関わりによって達成できてきた。しかし新人看護師では、段階的にであっても自主的に判断し行動することが求められるが、実際には適切な報告・連絡・相談ができない状況がおきている。前述の社会人基礎力とは、看護師が現場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的能力である。しかし新卒者の中には、報告・連絡・相談ができないケースが散見され、その必要性は理解しているが、関係性の中で自分の考えや疑問を自ら発信できない者もい

る。その他、知識不足や内省力不足によるものもある。理由はさまざまであるが、看護師としての責任を遂行することができない結果を招いている。さらに指導する側の問題もあり、現任教育のあり方も見直す必要があると感じている。このような状況から今後看護基礎教育に望むこととして、「学生を看護師という専門職業人になる人として育てて欲しい」と結んだ。

最後に石川県立大学基礎看護学准教授石川倫子氏は、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」を育成する必要性を述べ、他者と協働して思考・判断・表現を深める対話力や科学的に思考・吟味し活用する力が求められると説明した。その上で臨床判断力の育成にも繋がる「思考力・判断力・表現力」を育む教育方法の一つとして「パフォーマンス評価」について述べられた。このパフォーマンス評価は、知識・技術の総合的な活用力を質的に評価する「学習としての評価」であり、同大学で実際にそれらを活用した「パフォーマンス課題に基づく評価」、「表現に基づく評価」の実際を紹介された。パフォーマンス評価を用いた実習指導の実例として、在宅看護論実習で思考力を育成する教育方法を説明していただいた。学生が何に気づけばよいのか、教員の関わりは濃密でみっちりとする学生の思考につき

あいながら、引き出していく指導を実践されており、会場に集まった教育職の方々にとって参考になる実例紹介となった。

全体ディスカッションでは、フロアから関根氏へ臨地実習時間の考え方について質問が寄せられた。看護専門学校はこれまでに臨地実習の時間を規定どおりに実施することや、臨地実習をどの場所で行うかといった規定を文部科学省認可校（大学等）よりも厳しい条件として課せられ、遵守してきた歴史がある。それ故、今回の改正で臨地実習の時間が、1時間60分を45分から60分換算へと規制が緩和されたことについて、どのような検討がなされ結論に至ったのか質問があり、関根氏からは大学教育での現状を鑑み規制を解くに至ったとの説明があった。

早朝からのシンポジウムにもかかわらず、教育・臨床それぞれの立場で沢山の参加者が集ったシンポジウムであった。これからの看護師として求められる姿はどのようなものなのか、自分たちにも求められる姿であるとの認識と共に、学生や新人看護師と先輩看護師が共に成長していく必要性、新カリキュラムへの関心の高さの現れと感じた。

〈本論文は第73回国立病院総合医学会シンポジウム「未来の看護師を育む新カリキュラム」で発表された内容を座長としてまとめたものである。〉